

福岡自然農塾スタッフ

日々の暮らしの中にこそ

鏡山悦子

自然農暦 27 年

福岡自然農塾代表

一貴山学びの場(約 8 反)と鏡山農園(約 5 反)を営んでいる。米、季節の野菜、果樹、シイタケ、ニホンミツバチの養蜂、お醤油作りは今年 2 年目。

自然農を始めて 28 年目となりました。

ここ一貴山での暮らしは、24 年目になります。

中山間地の棚田の一角に家を建て、井戸を掘り、棚田には、川から水を引き、米を作り、野菜や果樹、シイタケ等を栽培し、7 年前からはニホンミツバチも飼い始めました。

30 代の頃、思い描いていた農的暮らしが、少しずつ、少しずつ今の私たちの暮らしになってきたと思います。

「耕さず、草や虫を敵とせず、肥料農薬を用いない、^{いのち}生命の営みにひたすら浴う」自然農とその師 川口由一さんに出会ったことが、ほんとうにありがたいことでした。出荷こそしていませんが、約 5 反の田畑を、耕運機や田植え機、コンバイン、など大型機械と、枯渇燃料を使わず、鍬、鎌、スコップくらいの道具で営むことができます。私どもは、4 人家族で、28 年前は、4 歳と 6 歳だった幼い娘達は、毎週のように、親と共に、山の田んぼ、畑に通い、虫や草と遊び、その遊びの延長で、田植えや稲刈りも経験しました。

今では、2 人とも自立し、1 人は、結婚して第一子も誕生しています。そして、夫は定年を迎え、毎日思う存分田畑に通える日々となりました。あつと言う間の 27 年間のようにも思えますが、やはり、この道のりは長く、私達が人本来の営みを取り戻し、その術を一つ一つ、獲得していく学びの道でもあったかと思えます。

初めは、自分達の食べるものくらいは自分達の手で、という思いからのスタートでしたが、敵を立て、種を降ろし、作物の生長に伴い、手を貸して、応じていくという自然農の^{いのち}営みは、生命に沿い、自然に任せ応じながらも、自らを生きなければならないという、そして、人はどう生きていくべきかを常に学ぶことでもありました。

生きていくということそのことは、まさしく日々の暮らしの中にこそあって、各々が人といういのちの花を咲かせ、実を結ばせることにあると思います。

生まれ、そして死に至る、お米やお野菜と何ら変わる事のない私達のいのちですが、それでいて、人としての、貴く、かけがえのない我いのちを、損なうことなく、美しく生きるためには、どうあるべきか……。この世界で起こる様々な災い、事変、環境変化などについて、私はどう受け止め、どう行動するか、最も身近な家族や、学びの場に来られる若い人達に対し、いかに役目を果たし、応じていけるのか……。沢山の問いに答えを見い出していく道でもあったかと思えます。

そして、山に暮らすということは、農を営むということは、この宇宙自然界とより一体になる、ということでもあります。

山に暮らしていると、空の色、雲の形、みるみるうちに変化する大気の流れ、そして、山を彩る木々のグラデーション、季節の訪れを告げる沢山の草花、花木、そしてその香り……この豊かな^{いのち}生命の世界に生きて、かつ生かされていることを日々思います。

また、時に、嵐が来れば、大きな岩をも運ぶ激しい濁流に、棚田を這うように鳴り響く雷の音と光に、山中をうねらせて吹く風に、震え恐れおののくこともあります。実際、そういう時は、一刻を争って、棚田の水を止めに走らないといけませんし、それをやったとしても、結果、大きな穴が空いたり、木が倒れたり、様々な試練も待ち受けています。

それに、サル、イノシシ、アナグマなどの獣害……。

若い頃は、泣きたいほどに、何から手を付けて良いか分からず、途方に暮れることもありましたが、夫は、淡々と、淡々と、大きな石を運び、小石を運び、そして土を入れて、何日もかかってその仕事をやりました。

それまでの私達の人生に、そんな経験は皆無でしたが、川口さんからの学びと、それと、私達の^{いのち}生命の中に宿している、遠い過去の人々の経験からくる智慧が、自ずと湧いてきたと言うしかありません。

そして、こんな時、何故か不思議に力も湧いてきて、今まで味わったことのないような満ち足りる思いと、爽やかな感動に満たされるのです。

そして、この美しい棚田が手入れされ、全ての田に水がいきわたる6月の頃、あらためて、この石垣を築き、土を入れ、この棚田を手入れしてきた先人の仕事に、毎回深く感動するのです。過去の人達のたゆみない営みによってこそ、この里山の風景は作られてきたのです。

合理化、オール電化、全自動、AIなどの世界からは、程遠い感動です。

「本当に大切なことは、暮らしの中でしか伝えられない」川口さんはそうおっしゃいます。

その暮らしの上でしか人は人として十全に生きることができないと私も実感しています。

また、自然農が耕さない過去のたくさんの^{いのち}生命の重なりの上で、次の^{いのち}生命が育っていくように、過去を受け入れつつ、学びつつ、子は親を超えていく……そんな在り方を願っています。

最後に、先日昨年の冬に初めて仕込んだおしょう油のもろみを、搾りました。暗い蔵の中で、毎日かき回し、醸造する、従来のお醤油造りと違って、お日様の力を借りて、できるだけ余計なことをしない、お日様醤油は、なんとも言えない、やさしい風味で、美味しいものになっていました。ありがたいことです。

私達日本人が、昔から、当たり前のように営んできた、暮らしの一つ一つの^{すべ}術を人まかせにせず、自らのものとして、獲得していくこと、この学びは、私達を大きく成長させてくれるものでした。

そして、願わくば、子に、または、次の世代の人達に伝えていくことができればと思っています。

私たち、人は、この^{いのち}生命の世界における自らの分を知り、これ以上、いのちを、弱らせることなく、他をおかすことなく、自らの生命の花を咲かせ、全うしたいものです。

自然農からの気付きと喜び

鏡山英二

自然農暦 27 年

一貴山学びの場（約 8 反、27 名）代表

鏡山農園（約 5.0 反）

米、野菜、果樹、シイタケ、ニホンミツバチの養蜂。

電気を使わない人力足踏み糶り機の制作。

自然農に取り組んで 28 年目です。最初は、自然の中でお米や野菜を育てることだけで、とても楽しく、自然農を続けてきました。今では、自然農を通して、自然農が指し示すいのちの世界の奥深さと人としての本来のあり方に気付くことができ、喜びの中で、更に人として成長し続けたいと願いつつ自然農に取り組んでいます。

今、季節は冬。先日、昨年収穫したお米の稲藁と籾殻を田んぼに返しました。また、もうすぐ今年のお米作りが始まります。春を前にして田んぼの溝を掘り、苗床を作り、春にはお米の種を降ろし、苗床の稲の生長を見守る。梅雨の田植えの時期は、毎日、早朝から、少しずつ、こつこつと田植えを続ける。初夏の田植えが終わるころには、田んぼの水管理とともに苗の成長を見守る。真夏には、強い日差しのなか、遅く育った稲の周囲の草刈り。秋には、稲穂が垂れ、黄金色に輝くころ、稲刈りをして、稲架かけをする。そして晩秋、お米を脱穀、唐箕、糶り、精米して頂く。自分で作った棚田のお米がなんと美味しいことか。また、年末には自然農のモチ米で餅つきをして、お正月に頂く。そのような一年を重ねています。

自然農を始めた当初は、会社を辞めて別の生き方をしたいと思って始めた自然農でしたが、仕事と二足のわらじで自然農に取り組んできました。

このことで、逆に、会社を辞めることなく、仕事も学びと思い、楽しみながら続けることができました。これは、川口さんから、自然農の方法技術の他に、人として生きる姿勢をも学ぶことができたことが大きいと思います。

昨年は、梅雨の末期の大雨の他、地震などの災害もありました。夏はとても暑く、山間の一貴山でも、夕立や雷雨が一回もありませんでした。このためか、高温過ぎて、お米や野菜の生育にも影響があったようです。秋は短く、冬は、暖かかったり、寒かったりです。毎年、気候が目まぐるしく変化しています。地球規模で気候変動が進展しています。それにも関わらず、相変わらず経済優先の社会となっているのは残念です。また、電子技術の進歩で益々便利な世の中になっていて、人口知能が色々な機器に組み込まれ、あたかも人は考えなくてもコンピュータが最善の答えを出してくれる……。ややもすると、そのような錯覚に陥りがちです。人が自然界から遊離し、自分の体や知恵を駆使する機会が益々少なくなっているように思います。本来の人としての在り方はどういうところにあるのかを見失いがちな状況となっています。

このような時代の中にあっても、自然農に取り組むことで、自分の身体を使い、田畑を整え、知恵を働かせてお米や、野菜に応じて手を貸し、その中で、私自身の奥底に眠っていた、人類がこれまで蓄積してきた叡智を駆使し、人本来の姿になることができると思っています。

更に、川口さんから人としての生き方を学べたことで、安心の日々を送ることができました。

また、人が生きていくうえでは、「私を治める」ことが、何事にもまして大切だと思います。

いろいろな困難にぶつかった時、いのち本来の本当のところはどうなっているのか。いのち本来の視点からみることが大切です。部分に捉われることなく、いのちの世界の本来のところを見失わない自分、「絶対界に立つ」ことのできる自分であることが大切。

そして、今できることを、日々こつこつと、誠実に、精一杯取り組む。そうすると、自ずから、今に、私に納得が入る。今の私に納得し、今が最善と思えることが大切だと思います。

自然農と向き合うことで、田畑以外の日常生活においても、こころを静め、宇宙自然界を認識して、絶対界に立つことのできる私となり、私を治め、生きる術を極め、歩む道^{すべ}を確かにし、人として成長し、大安心の私になり続けたいと思います。

私は、一昨年、定年退職して、これまで出来なかった、大豆を自給し、味噌造りに加えて、醤油造りにも取り組んでいます。また、長年取り組んできた人力糶り機も、そろそろ完成させたいと思います。また、昨年からは、古楽器（ビオラダガンバ）を習い始め、リコーダーとのアンサンブルが楽しみです。

我が家と農園を楽園にし、これからの人生を楽しみ、^{まっとう}全したいと考えています。

一年に一度のお米作り。これから、何回お米作りができるかわかりませんが、生きている限り自然農のお米作りを続けたいと思います。

今この時

木下 まり

自然農歴 27 年

田 0.3 畝 畑 0.5 畝

今年のお米はとてもきれいでした。10月の稲刈りでは左手でとらえるひと株のたくましさを感じつつ、実りの喜びと感謝の思いでいっぱいになりました。11月の脱穀では、これで1年間の糧が十分に与えられたと安堵しました。自然農のお米づくりを初めて27年になります。その年その年の天候や手の貸し方でお米や野菜の姿は変わりますが、田畑は年を重ねる毎に豊かになっていきました。24年間耕すことのなかった田畑では、目に見える生き物、目に見えない微生物たちが、生きては死に、また生きては死にを繰り返してきました。いのちの重なりの中で次のいのちが生かされ、また次のいのちへと繋いでいく、そこで育った作物を頂く私の中にも脈々と続くいのちが重なり、そして次のいのちを生かしていく。遠い遠い過去から続く今の私は、これから先の未来へと繋がっている。そう考える時、この今がかけがえのないものに思えてなりません。自然農の田畑に立ってみると、いのちの重なりを感じますし、また同時に今この時を精いっぱい生きている虫や植物の営みにいのちの不思議さを覚えます。私も、この今を精いっぱい生きるものでありたいと思うのです。

昨年から鏡山さん達の助けを頂きながら、ニホンミツバチを飼い始めました。両後ろ脚に花粉団子をいっぱいつけて巣にもどってくる姿が何とも愛らしく、見ていて飽きることがありません。42日間という短い生涯をただひたすらに、あるものは花粉を集め、あるものは巣の中を整え、あるものは幼虫の世話をし、それぞれが自分の役目を全うし死んでいく。小さなからだで巣を造り上げ蜜を蓄える働きは見事というほかありません。自然界は、私が生きていく答えをいつも用意しています。私が得たいと思えば、田畑がミツバチが幼子が、示してくれています。50代半ばを過ぎ、残された人生をより確かなものにしたいと願っています。

27年前、農のことは何も知らず、ましてや自然農の深い理もわからず、「こんな眺めのいい大自然の中でお米作りができるなんて、おもしろそう!」、という思いから標高400mの山の棚田で始まった自然農でした。あの頃私は20代で、その後出産、子育て、親の介護、仕事と、私の暮らしも変化してきましたが、暮らしの中心に自然農がずっとあった、あり続けている、ということは本当にありがたいことだと思っています。親であり、娘であり、妻であり、保育士であり、そのどれもが私の人生であり、私の人生は私が生きる、私の人生は今、この時なのだ、そう思う2019年のスタートです。

自然農の田畑に立ち、感じ、分かち合う

村山 直通

松国自然農学びの場（5反、60名）

花畑自然農塾（2反、28名）代表

退職して3年、毎日田畑に通う日々です。在職中は福岡市南区の花畑自然農塾と糸島市の松国自然農学びの場の2か所の田畑で実践と指導をしていましたが、退職してから福岡市西区元浜の田畑（約1,5反、8家族）を新たに始め、それに下関市内日の田畑（6反）の指導と実践を始めました。その後、宇部市の中山間地で自然農の学びの場が始まり、こちらは月1回、下関の田畑には月に7～8回、下関の妻の実家から通っています。前日入りするので、月の3分の1ほど下関の住人になっています。

また、今年からはUR都市機構が福岡市早良区の団地内で新たに始める共同農園に関わることになり、その参加者が自然農でやります、ということになれば、月1～2回その農園にも出かけることになると思います。これは、この団地の校区の小学校が昨年から自然農を学級園や花壇に取り入れ、ぜひこの共同農園も自然農でやってほしいという要請で引き受けることになったものです。この学校へは、昨夏校長先生から先生たち向けに自然農の研修会講師を頼まれ、話をさせていただきました。長年学校事務職員として同じ現場に働いていたものとして、まさかこんな日が来るとは思ってもいないことでした。全国でも公立の小学校で自然農をやっているという話を聞いたことがないし、このような共同農園で自然農を始めるというのもとてもめずらしいことと思いますし、うれしい流れです。

7年前に佐賀県武雄市が自然農の農園を始めました。市立の自然農の農園は全国初だったと思います。その当時、松国の学びの場の塾生だった女優の杉田かおるさんが武雄市の食育に関わられていたこともあり、当時の市長さんや議員さんが糸島市の自然農の田畑を見学に訪れ、実際に自然農の野菜のおいしさやすばらしさを感じられたのがきっかけです。事前に市の担当者が自然農の勉強に糸島まで通って来られていましたが、参加者への指導は難しく、私が毎月1回指導に通うことにしました。学習会を開き、農園の一角に実習畑を作り見てもらうことで、参加者や見学者の自然農への理解が深まったと思います。残念ながらその農園が新幹線工事のため使えなくなり、3年でこの市立の自然農園は終わりましたが、今もその農園で学ばれた方は自然農を続けておられ、ご縁は続いています。このことは、私にとっては今につながる大きな経験でした。

そんな流れの中、今年も毎日自然農の田畑に立っています。

環境問題をはじめ、自然災害、社会のこと、家族や自分の健康のこと等々、いろいろな不安になるようなことがたくさんある中、自然農の田畑に立つと、お米や野菜のいのちと、草々、虫たちのいのちと、たくさんいのちたちと私のいのちがつながっている、ひとつなんだと感じます。

風を感じ、大空を見上げ、呼吸を意識すると、今ここに帰り、静寂が訪れます。

自然農の田畑に立てる喜び、分かち合える喜び。なんともうれしい、ありがたい、年の初めです。